
仮面ライダーW another story 『正義の罪/誰が為の世界』

はやぶさライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW another story 『正義の罪／誰が為の世界』

【Nコード】

N6329Q

【作者名】

はやぶさライン

【あらすじ】

ガイアメモリを使った犯罪が後を絶たない街、風都。闇が蠢くこの街で、仮面ライダーWとアクセルは人々を守るために戦い続けていた。

彼らは街にとって最後の希望。

そんなある日。亜樹子が目を覚ますと、風都から仮面ライダーが消えていた。竜は？フィリップは？翔太郎は？…そして、仮面ライダーの罪とは？

悲しみとその中に隠された悪意が、今解き放たれる――

この物語の時間軸は、2010年に公開された劇場版『仮面ライダーMOVIE大戦CORE』の数カ月後設定となっております。

Prologue

「マ、マ…」

恐る恐る口を開いた子供の前で、母親は悠然と微笑んでいた。

「大丈夫。もう怖がることはないのよ」

床に散らばったガラスの破片を物ともせず、一歩・二歩と近付き、
ゆっくりと膝をつく。

「で、でも！」

「今までごめんね。ママ、もっと早くこうするべきだったわ。…だ
けど、もう何も心配いらなから」

「ヒィ…ッ!!」

差し出された両手を見て、子供は震え上がった。
真っ赤な血に染まった母親の腕。
ガチガチと、無意識に奥歯が鳴る。

「さあ、おいで。」

―バタンッ!―

気が付いた時には、家を飛び出していた。
無我夢中で足を動かし、夜の闇のなかを全力で走り抜けて行く。

止まらぬ涙で視界がぼやけ、何かに躓いて倒れる。
思うように動かない足がもつれて幾度となく転んだ。

その度に立ち上がったは、また走り出す。

（助けて、助けて、助けて——！！！！）

子供は懸命に走る。

…声にならない悲鳴をあげながら。

「あら。こんな夜中にお外に出たら駄目じゃない」

足が、ぴたりと止んだ。

「う……あ……」

行く手を阻むようかのに、母親が前方に立っている。

足が竦んで動けない子供に穏やかな笑みを見せ、母親は小さな箱のような物を取り出した。

「いけない子ね…」

手のひらの中にすっぽりと収まるソレを首筋に当てた瞬間、

【 P l a n t ・ プ ラ ン ト ・ 】

野太い声が響き、小さな箱は母親の体内に？まれていった。

「ママ……マ、マ……ママ……ま……」

子供はただただ母親を呼び続けている。

けれどもう、そこに『ママ』はいない。

prologue (後書き)

仮面ライダーW another story 『正義の罪／誰が
為の世界』

今回は序章です。次から本編が始まります。

何かと矛盾点も多いかとは思いますが、Wがお好きな方に流し程度
で読んで頂けると嬉しいです。

探偵と警視 / 白の世界

どこまでも続く真つ白な世界。

そこに左翔太郎はいた。

上下左右、360度見渡してみても、白の世界はどこまでも果てしない。

まるで永遠。

自らの影すら映さないこの場所では、自分の存在はとても曖昧なものに思えた。

しかし、翔太郎はこの世界を知っている。

前に一度だけ、フアングメモリによって暴走した相棒を救出するために踏み入ったことがあるからだ。

だからこそ、疑問に思う節がある。

あの時はフアングジョーカーという二心一体の状態で、尚且つ相棒を止めようと必死だった。

この世界に入れたのは奇跡に近い。

だが、何故か今再び、自分はこうしてこの場所に立っている。

ここに来る以前の最後の記憶は、職場兼ホームの鳴海探偵事務所で

コーヒーを啜りながら報告書を作成していた事だけ。
翔太郎にとっては当たり前の、ごくありふれた日常の一片に過ぎない。

腰に手を当ててみる。無論、ダブルドライバーは着けられてはいない。

変身はおろか意識の共有さえしていない今の現状は、翔太郎の理解の範疇を超えていた。

「ったく。一体どうなっただ、こりゃ……」

ぼやいてみたところで、この異常事態を打破できる訳でもなく。帽子を被りなおした彼は、意を決して白の世界へと足を進めた。

「…フィリップ」

どこかに必ずいるであろう、この世界の主たる相棒の名前を口にしながら――

行けども行けども、終わりが見えない白の世界。

暫く歩き続けた翔太郎だったが、何の変化も見受けられない状況に業を煮やし、ついには座り込んでしまった。

はつきり言って、飽きた。

相棒に危機が迫っているかもしれないという時に、こんな事を思うのは不謹慎だろうか。

けれど、探偵として日々を勤しんでいる彼にしてみれば、白に覆われただけの世界なんてただの退屈な空間でしかなかった。

それに焦ってはいけない。ここにフィリップが居たとしても居なかったとしても、だ。

こんな事態だからこそ、冷静でいられるか否か。最終的にそこが重要になってくる。

（ちよつくら休憩すつか）

考えをまとめ上げた所で、翔太郎の耳が不意に音を捉えた。

——カツ。カツ。カツ。

ゆつくりと近付いてくる、何者かの足音。

勢いよく顔をあげ、音のした方を見やる。

「……っ！」

相手の顔を認めた瞬間、翔太郎は言葉を詰まらせてしまった。

向こうもこちらに気が付いたらしく、目を見開いて驚愕の表情を浮かべている。

「左か……？」

「て、照井い……！」

紛れも無い、そこに立っていたのは照井竜。

風都署・超常犯罪捜査課課長の肩書きをもつ彼は、翔太郎やフィリ

ツプと同じ仮面ライダーでもある。

共に戦う仲間——だが、しかし。彼がこの場にいるのは到底有り得ない事だった。

ふたりは信じられないものを見るような目で互いを見合っていたが、やがて翔太郎が先に口を開く。

「つか、何でお前がここに？」

「俺に質問をするな」

その相変わらぬ物言いに、思わず笑えてくる。

「はっ、それもそうか。…でも予想外だったぜ。まさか、照井が“地球の本棚”にいるなんてよ」

「地球の本棚…？」

竜は辺りを一望し、そしてまた翔太郎と顔を合わせた。

「ここが…地球の本棚、なのか？」

「ああ。たぶんな」

探偵と警視 / 白の世界（後書き）

いきなりのカオス展開ですみません。

ちなみに、彼らがいるのは地球の本棚です。が、翔太郎も照井も検索機能使えないので本棚は出てきてません。

所長 / 事務所の異変と街のざわめき（前書き）

えー…今更なんですが、Wとアクセルは当分の間出てきません（え）

ごうごうごうめんなさいっ…！

所長 / 事務所の異変と街のざわめき

「……ん」

目を覚ました亜樹子は、気だるさを伴いながら上体を起こした。どうやら書類の整理をしているうちに眠ってしまったらしい。応接用のソファにうなだれるようにして寝ていたため、身体中のあちこちが痛かった。ゆっくりと伸びをして、凝った筋肉をほぐしていく。

「あー…なんか、ダルー」

寝起き独特の頭がぼうつとする感じ。いや、いつものそれよりだいぶ酷い気がする。

頭の中で脳が振動しているような…というのは大袈裟かもしれないが、視界がわずかに揺れ動いているのは確かだ。

「それにしても…」

チツチツチツチツ――

しん、と静まりかえった室内では、秒針の音がやけに響く。

「誰もいないってどういうことよ！出掛けるなら、起こしてくれればいいのに」

部下二人の姿が見えないことに多少の憤りを覚えながら、テーブルの上に散らかしっぱなしだった書類に手を伸ばす。

もし先ほどの状況で依頼人が訪ねてきたら、ぐーすか寝ている亜樹子を見てそそくさと帰るに違いない。

貴重な仕事のひとつを逃すだけでなく、赤の他人に寝顔を見られるおそれがあったのだ。亜樹子にとってはそちらの方がよっぽど問題だ。

昼寝をしてた自分の落ち度を棚にあげ、彼女は小さく溜息を吐いた。

しかし、翔太郎はおろか、あの出不精なフィリップまでもが外出中とは。

珍しいこともあるもんだと立ち上がりかけた、その時。

「あれ？」

ふと感じた違和感。

自分の中の直感めいたものが、何かがおかしいと訴える。

どこか、変だ。

（何だろう？）

訝しげに思いながらも、室内を見回してみる。

…事務所だ。特に変わった様子はない。

霧がかかったようなモヤモヤした感じを抱きつつ、

「気のせいよね…？」

と、思い直すことにした。

まだ寝ぼけているのかもしれない、そう結論付けて。

「ああー!!」

突然、大声を張り上げた亜樹子は頭を抱える。
しまった、大事なことをすっかり忘れていた。

「今日、3丁目のスーパーでタイムセールやってるんだっけ!?!や
っぱい!間に合わないかも!」

彼女は大急ぎで書類の束を片付け、慌しい様子で出掛けて行くのだ
った。

——チツチツチツチツ、

誰もいなくなった室内に秒針の音がこだまする。
まるでそれは新しい時を刻むかのごとく、静かになった部屋で反響
し続けていた。

人間は他の動物に比べて、とても鈍感な生き物である。
常に身の回りを警戒する野生動物とは違い、食物連鎖の頂点に立つ

人間に天敵と呼べるものはいない。よって、脅威に晒される心配がないからだ。

それだけではない。

人が進化を遂げる過程で最も発達させた部分。つまり、脳。

牙や角、それらから回避する能力さえ持たない人間が、何故こゝまで生き延びてこられたのか？

それは脳が他の動物より優れていたからに他ならない。

故に、人はある意味、脳に対しては絶対的な信頼を寄せている。

場合によっては記憶を過信しすぎてしまう。すると、脳はかつてに“これはこうだ”と思い込む。

思い込んでしまえば、微々たる変化にはなかなか気付きにくいものだ。

身近であればあるほど、思い込みはより一層強くなる。

…そう。例えば、先ほど出て行った亜樹子のように。

彼女には当たり前の風景過ぎて気付けなかったが、既にこの鳴海探偵事務所ではある異変が起こっていた。

事務所の一角。白いハット帽が掛かっている壁。

今は亡き亜樹子の父・鳴海壮吉の遺品が飾られたこのスペースには、本来ならば翔太郎の帽子も一緒に掛かっているはずだ。

けれど、彼が大事にしているお気に入りの帽子達は忽然とその姿を消していた。

あるのは、壮吉の帽子ただひとつ。
それが何を意味するのか…。彼女はまだ知らずにいる。

「大量、大量♪」

無事、目的のタイムセールに間に合った亜樹子の両手には、ぎゅしりと詰まった買い物袋がぶら下げられていた。

勝ち取った大量の戦利品ににんまりと笑みを浮かべ、上機嫌な足取りで帰路に着く。

「ん？」

すると、前方から血相を変えて走ってくる若い女性の姿が見えた。

「逃げて！化け物よ！！」

女性は亜樹子に向かってそう叫びながら走り去って行く。

「化け物？って…もしかしてドーパント！？」

『ドーパント』であるならば、鳴海探偵事務所所長としては居ても立ってもいられない。

考えるよりも即行動。

亜樹子は買い物袋をぶら下げたまま、たちまち駆け出していた。

女性が逃げてきた方向に来てみれば、なるほど。高いビルが立ち並びオフィス街で、一体のドーパントが暴れ回っているのが見えた。

逃げ惑う人々のなか、亜樹子は道端に植えてあった木の陰に隠れて様子を伺う。

「こんな街中で暴れるなんて、いったいどーいう神経してんのよ！」しかし、こうしてる間にもドーパントの破壊行動は進んでゆく。この分だと、いつ人に危害が及ぶかわからない。

「翔太郎くんたちに連絡しなくちゃ！」
急いで両手の荷物を地面に降ろす。

—ドンッ！—

携帯電話を取り出した亜樹子の頭上で爆発音が響いた。

「…へ？」

上を見上げた亜樹子の目に映ったのは、自分に向かってまっすぐに落ちてくるコンクリートの塊。

避けられない——と、死を覚悟した瞬間

「危ないっ！！」

「きゃあ！？」

強烈な体当たりを受け、亜樹子の体は横に飛んだ。それとほぼ同時に、コンクリートの塊は地面に叩きつけられる。

「亜樹ちゃん無事かい!？」

「え…?フィリップくん？」

窮地を救ってくれたのはフィリップだった。

「怪我はないようだね。…よかった」

「ちょ、ちよつと待ってフィリップくん!その格好はどうしたのよ!？」

亜樹子が驚くのも無理はない。

フィリップはどこかの校章入りの制服に身を包んでいたのだ。

「ああ、これは…」とフィリップが口を開きかけた時、ドンッ!という爆発音が再び聞こえ、ふたりは咄嗟に身を屈める。

「とにかく!事情はあとで説明するから、今はここを離れるんだ!」

「ええ!?!でもアレ…うわぁ!！」

「いいから早くっ!」

フィリップは渋る亜樹子の手をとって、降ってくる瓦礫のなかを縫うように走り始めた。

その最中、亜樹子はよく知る人物を見つけた。

逃げ去ろうとする人の流れとは逆に、ドーパントがいる方向へと向かって歩いていく男の姿を。

「あつ!おーい、竜く…」

—ドン!ドン!ドンッ!—

呼びかけた亜樹子の声は爆音によってかき消されてしまう。

「亜樹ちゃん走って!!」

「うっ、うん!」

フィリップの後に続きながら、もう一度だけ振り返る。

真っ赤な服が印象的なその後ろ姿。

戦地に赴く夫の背中に、彼女は心の中でエールを送るのだった。

所長 / 事務所の異変と街のざわめき（後書き）

ここまで読んでくれた方がいたら、有難うございます。

こんなに長くする予定ではなかったのですがね…

出来上がって見たら、かなりのグダグダ感orz 仕方ありませんでした（泣）

次はフィリップサイドの話です。では、また。

運命の子 / 授業の風景

ガレージでいつものように検索に没頭していたフィリップは、突然ひどい目眩に襲われた。

「うっ…」

目元を手で覆いながらその場にうずくまる。
暫くの間そうしていると、目眩は自然と治まっていった。

目元を覆っていた手はずす。…と、次に目に入った光景はフィリップの思考を一瞬にしてフリーズさせた。
自室のガレージに居たはずの彼は、いつの間にか全く知らない場所に来ていたのだ。

「…!？」

思いがけない事態に言葉を失うも、すぐさま『冷静になれ』と自分に言い聞かす。

一体、何が起こったというのか？
止まっていた脳の機能をフル回転させて考える。

常人ならパニックを引き起こしていたかもしれないこんな状況でも、フィリップはドーパントの線を疑うことで納得ができた。
いや、そうとしか考えられなかった。

人間が知りもしない別の場所に瞬間移動するなんて、そんな馬鹿げた話は聞いたことがない。

この事態は十中八九ドーパントの仕業によるものだろう。

（まったく…こういう厄介事に巻き込まれるのは翔太郎の役目じゃないのかい？）

やれやれと首を振る。

兎にも角にも、今すべきことは『現状の把握』だ。

相手の能力が何なのか解らない以上、下手に動くのは危険。そう判断したフィリップは、警戒の心を弛めることなく辺りの様子を窺い始めた。

まず目に留まったのは大きな黒板。次いで、その黒板の前に立つ初老の男性。

事務所のふた回りほど広い部屋には、30人前後の男女が収容されている。

歳の頃は10代後半といったところか。初老の男以外は、皆一様にそれぞれの席につき、本を眺めたりノートに何かを書く仕草をしていた。

（…なるほど。）

初めて目にする光景でも、大体の検討はつく。

なんせ、この項目に関してはもう随分と前に閲覧し終えていたからだ。

「学校…か」

ぽつり発した言葉に、フィリップの前の席に座っていた女生徒が振り向いた。

「え？何か言った？」

「！…い、いや、なんでもない」

「そう」

「あ、ねえキミっ」

前に戻ろうとした女生徒を慌てて呼び止める。

「なに？」

「えっと、その…僕、帰ってもいいかな？」

問いかけられた側の女生徒は、目を丸くしてフィリップを見つめた。

「どうして私に聞くの？」

「あ、いや、それは…」

逆に問われると言葉に詰まる。

おそらく今は授業中と呼ばれる時間だろう。

その独特の空気は、黙って立ち去るには少々そうし難い雰囲気があった。だから聞いてみた。誰かの了承を得られたらすんなり立ち去れる、そんな気がして。

しかし…どうやら、聞く相手を間違えたようである。

いくら学校という施設について知識があつたとしても、授業を体験したことがないフィリップは、どう立ち振る舞えばいいのかが分からない。

しばし答えに迷っていると、女生徒が「あ」と小さく声を洩らした。

「もしかして体調が悪いの？」

「えっ？…ま、まあ…」

嘘だ。体調は万全だ。けれど、この場をやり過ごすには話を合わせ

るしかない。

すると女生徒は前を向き、黒板に数式を書いていた初老の男にこう話しかけた。

「先生！園咲くんが具合悪いそうです」

「なっ！？」

女生徒の一言にフィリップは驚愕した。

今、確かに彼女は“園咲くん”と言ったのだ。

「待ってくれ！なぜ君が僕の本名を知っているんだ！？」

「え？だってクラスメイトでしょ？」

「クラスメイト…？僕が…？」

このやり取りを見ていた初老の男が慌てた様子で駆け寄ってくる。

「おいおい、どうした園咲？まさか君に限って寝ぼけてる…なんてことはないよな？」

彼もまた、自分の本名を知っているらしい。

「いえ、すみません…」

「変な冗談はやめてくれよ、君は我が校の星なんだ。まあ、体調が悪いなら仕方ない…今日は帰ってゆっくり休みなさい」

なんだか一方的に好き放題言われた気もするが、フィリップは「はあ…」と苦笑いを浮かべながら席を立つ。

もう、一々反応するのにも疲れた。

そのまま出口に向かって歩いていくと「園咲！」と再び男に呼び止められた。

「君、手ぶらで帰るつもりなのか？」

「…はい？」

途端、周りの生徒たちがクスクスと笑い始める。

（理解不能だ。）

考えることを止め、首を傾げたフィリップの元にやってきたのは先程の女生徒。

「はい。教科書とか全部入れておいたからね」

と見たこともない鞆を渡され、それでも仕方なく礼を言い、ざわつく教室をあとにした。

ビルの隙間から覗く風都タワー。

街を象徴するタワーが見えるということは、ここは間違いなく風都のどこかに位置する。

その事実がフィリップを幾らか安心させた。

けれど、さっきの出来事はどう考えても説明がつかない。

相手の能力を検索するにしても、現時点では“キーワード”と為りうる情報が圧倒的に不足していた。

「…ともかく、一旦事務所に戻ろう」

今頃、翔太郎と亜樹子が居なくなっただけに自分に気付いて探し回っているかもしれない。

それだけならまだいいが、彼らも同じような事態に巻き込まれている可能性だってあるのだ。

一刻も早く合流しなくては。

ひとまずの方針を決めた矢先、人の流れが急に変わった。

何やら辺りが騒々しい。人混みのなかを掻き分けて進んでゆくと、原因はすぐに見つかった。

「ドーパント！」

ビルが立ち並ぶその中心にいたのは、磨いた鉄のような色をしたドーパント。

頭と両腕の先端は円柱状の棒となっており、全身を描くフォルムに曲線はなく、何かの機械を模していると思われる。

「こんな時に……っ」

焦るフィリップの心情など露知らず、周辺の物を一通り破壊尽くしたドーパントは動きを止めた。

右の腕を顔の位置まで上げ、力を込めていく。すると、腕から伸びた棒の先端に光が生まれた。

尚も力を込め続け、やがて凝縮された光はひとつの塊となる。

（何をする気だ？）

フィリップが疑問に思っていると、ふいにドーパントが顔をあげた。視線の先にあるのはこの辺りで最も高いオフィスビル。

（まさか！）

ドーパントの意図はすぐに読めた。と同時にそのビルの真下に佇む

亜樹子の姿を見つける。

「亜樹ちゃん!？」

彼は思わず飛び出していた。

狙いを定めたドーパントの腕から光が放たれる。

直線を描く光の筋はビルの中央へと当たり、周囲に爆音を轟かせた。

運命の子 / 授業の風景（後書き）

フィリップ編、なかなか時間が掛かってしまいました。

というか、それぞれの立ち位置を描く為に随分と話数を消費してま
すね……

もっとコンパクトに纏めたいところ。

黒鳥 / 困惑の階段

「……………それで、私を見つけたって訳ね。」

うんうんと頷いた亜樹子は、それでも疑いの眼差しを外さない。

「僕が嘘をついているとでも？」

「や、そうじゃないけどぉー」

オフィス街を抜けた二人は、さほど離れていない地下鉄の階段で身を潜めることにした。

今しがたの騒動で辺りに全く人の気配はない。

フィリップは自分の身に起きた出来事を簡潔に説明したが、亜樹子はどうも納得がいかないらしく口を尖らせて「ううーん…」と唸るばかり。

「僕にも何が何だか…でも本当なんだ！その証拠に、ほら」

そう言っただけでフィリップがブレザーの懐から取り出した、ある物。受け取った亜樹子は目を丸くして声を張り上げた。

「ええっ？うっそ、これ…学生証!？」

開いた学生証明書には、確かにフィリップの顔写真が載っている。

「風都中央大学附属高等学校2年…園咲来人…：な、何コレ、私聞いてない…」

「ああ。教室にいた人達も僕のことを“クラスメート”或いは“生徒”として認識していた」

「つまり、今のフィリップくんはこの高校に通う“学生の園咲来人”ってこと？」

「そうなるね。…あ、そうだ亜樹ちゃん。翔太郎と連絡は取れる？」

傍らに置いていた携帯電話を拾い上げ、亜樹子は肩を落とした。それを見たフィリップも落胆する。

「ていうか、翔太郎くんのアドレス自体が入ってないんだよねえ…」

アドレス帳・電話の履歴・メールの送受信ボックス——いくら探しても翔太郎の痕跡すら見当たらなかった。

「ね、これもフィリップくんが高校生になった事と何か関係があるのかな？」

「おそらく。となると、狙いはやはり僕たちか？…いや、今は考えても仕方がない。まずはあのドーパントをどうにかしないと」

「あ、それなら心配ないわよ！竜くんがもう行ってると思うから「照井竜が？」

「うん。さっき逃げてる途中で、私見たもん」

「じゃあ、ドーパントの方は彼に任せよう。僕らは翔太郎を。それから、他に異変がないか確かめたい」

フィリップの提案に亜樹子はこくりと頷く。

「あともうひとつ、悪い知らせが…」

その時。

『クスクスクス』

第三者の笑い声がふたりの会話を遮った。

フィリップと亜樹子は後方へと勢いよく振り返る。
見上げた先——階段の上部に誰かが立っている。

「やあ、はじめまして」

ゆっくりとした口調で話すその声は、閑散とした駅構内によく響いた。

フィリップはおもむろに口を開く。

「…誰だ？」

逆光に目が眩んでよく見えない。だが、一段、また一段と階段を降りてくる毎にその姿がはつきりと確認できた。

すらりと背は高く、体の線は細い。

ショートボブに切り揃えられた髪は眩いばかりの金の色。

首に巻いた黒いストールが肩から胸元にかけて垂れ下がり、生地
の両端は動かたたびに太股の位置で揺れている。

中性的な顔立ちのため一見すると男女の区別はつかないが、声色
からして女性だろうとフィリップは判断した。

亜樹子を背に庇いながらじりじりと後退する。

程なくして階段を降りきり、フィリップはもう一度訊ねた。

「いったい君は何者だっ！」

今度は語尾を強めて問いただすように。

それでも意に介した様子もなく、顔には余裕の笑みすら浮かべている。

謎の人物は階段の中頃で足を止め、警戒心をあらわにするふたりを見下ろした。

「いい感じに混乱しているようだねえ」

何がそんなに可笑しいのか、クスクスと笑う。

その態度に苛立ちを覚えた亜樹子が、取り出したスリッパの先で謎の人物を指した。

「あんた、やっぱり敵ね！」

「敵……？」

一瞬驚いたような表情をし、そしてすぐにまた口角を上げる。

「やだなあ、ボクは敵じゃないよ。まあ…味方でもないけどね」

「なによそれ、意味わかんないっ！」

と亜樹子が更に怒鳴り、フィリップは黙ったまま顔を顰める。

「ふふ、まあそう警戒しなさんな。言ったよね？敵じゃないって。

ボクはただの傍観者さ」

「…傍観者？」

「そ、だからそんなに怖がらなくても大丈夫。キミたちに危害を加

えるつもりなんてないよ」

ほら、と両手を広げて武器を持っていないことをアピールして見せる。

だがそれは、フィリップの目に鋭さを増しただけだった。

「では何をしにきたというんだ？」

「挨拶がてらヒントをあげようかと思って。…ああ、そういえば自己紹介がまだだったよね。ボクは“クロカラス”」

「く、くろからす！？」

素つ頓狂な声をあげる亜樹子に視線を移し、“クロカラス”と名乗る人物は軽く頷いた。

「おかしな名前でしょう？でも、これはこれで気に入ってるんだよねえ。せっかく貰った名前だし、一応は使っとかないとき」

嬉しそうに話すクロカラスを見て、すっかり毒気を抜かれた亜樹子が「ねえねえ。この人って、もしかしてただの変人？」と小声で聞いてくるが、フィリップは素直に頷けない。

階段に立つこの人物が、フィリップの身に起こった異変と何らかの関わりがあるとみて間違いはない。

しかし、悠々と語る様からは敵意など微塵も感じられなかった。

『危害を加えるつもりはない』という言葉はおそらく本当だ。——
かと言って、油断はできないが。

フィリップは真っ直ぐ前を見据え、

「クロカラス」

と名を呼んだ。

「では教えてくれ。ヒントとは何だ？君はそれを教えるために、わざわざ僕たちの元に来たんだろう？」

「ああそうそう、忘れるところだった。ヒント…というか、この街についての基本的な知識だね」

「知識？」

「今、この街に“ガイアメモリ”と“仮面ライダー”は存在しない」

笑みを貼り付けたまま、クロカラスはそう告げた。

「…なんだって？」

「そんなのウソ！」

「嘘じゃないよ、本当だよ」

「それじゃあ、ここは風都ではなくどこか別の世界なのか…？」

「いいや、ここは風都だよ。キミたちが今まで過ごしてきた、ね」

「あーもお！訳わかんないっ！！」

話の展開に付いていけなくなった亜樹子が、ついには頭を抱え込む。

「難しく考える必要なんてないんだよ。風都から“ガイアメモリ”と“仮面ライダー”が消えた。ただそれだけさ」

「けど、ドーパントはいるじゃない！？」

「いるねえ」

「い、いるねえって…」

「調べることかい？」

「ボクの言ったことが信じられないのなら調べたらいい。そういうのは得意分野でしょう？…あ、そっかあ」

クロカラスの瞳にフィリップが映る。

より一層深くなった笑みは、不気味ささえ漂わせた。

「キミは今“地球の本棚”に入れないんだったねえ」

「え…何、それ？どういう事…？」

声を上げたのは亜樹子だった。

隣にいるフィリップは目を見開いて硬直している。

そんなふたりの様子を満足気に眺めると、クロカラスは踵を返して階段を上り始めた。

「ヒントはあげたよ。では、ごきげんよう」

はっと我に返ったフィリップが慌てて追いかける。

「待て！」

伸ばした手は、黒いストールに届くことなく空を切った。

「消えた…っ！？」

クロカラスと名乗った人物の影はもう既にどこにもない。

「フィリップくん！ねえ、今の本当なの？」

「ああ、本当だ。僕もついさっき、この階段に逃げ込んですぐに気付いたんだ」

「それもあのクロカラスって人の仕業？だったら、ガイアメモリや仮面ライダーが消えたっていうのも…え、それじゃあ…今頃、竜くんは…」

亜樹子の顔からサッと血の気が引く。

「奴の言葉を鵜呑みにしてはいけない！それに、万が一クロカラスの言っていた事が本当だったとしても、照井竜が策も無しに突っ込んでいくなんて馬鹿な真似はしないはず」

「…うん、そうだね！」

元々、ポジティブな性格の持ち主だ。亜樹子はフィリップの言葉を聞いてすぐに不安を拭い去る。

——そうだ。あの男は簡単には死んだりしない。

確信にも近い考えで「ふうっ」と息を吐くと、フィリップは顔をあげた。

「僕たちは、僕たちに出来ることをしよう」

黒烏 / 困惑の階段（後書き）

オリキャラ・クロカラス登場。無理矢理感が否めない…
そろそろ戦闘シーンを書きたいです（汗）

ドーパント / 街を壊す異形の者

光線が横切ったかと思いきや、次の瞬間、建物が傾き豪快な音を立てて崩れ去った。

「ハアーハハハハッ！！」

誰も居なくなつたオフィス街で男は高々と笑う。

ビルが、車が、外灯が――

目に付く総ての物が呆気ないほど容易く壊れていく。

まさに、快感。

「最っ高だぁー！アーツハッハッハッ！！！」

何故こんな事をしているのか。何故こんな事をしようと思ひ立つたのか。

浮かび上がった疑問は、泡のようにすぐに消えてしまった。

もう自分の名前すら思い出せない。

だが、男にとってはどうでもいい事だった。

今、彼を支配しているのはこれまでに感じたことのない“喜び”。力を手に入れた。それも圧倒的な力を。

「誰にも俺を止められない……!! 誰にもだああ!!」

抑えきれない興奮とともに、光線を放つ。

無残に壊れる街の風景。

光の熱がガスに引火し、あちこちで爆発が起こる。

瓦礫の中心で男は狂喜に打ち震えた。

しかし、最高の気分はそう長くは続かない。

「おい」

唐突に割って入った低い声。

その声によって、高揚感に浸る男は水をさされた。

じやり――、声の主は粉々になったコンクリートの破片を踏みしめながら男の前に姿を現す。

「ひとつ聞こう。その力、ガイアメモリか？」

赤いレザージャケットに、下もまた赤いレザージョーパンツという装いの青年は、その派手な形とは逆に静かな口調で訊ねてきた。

「はああ？何だソレ？」

男は小馬鹿にしたように嘲笑う。その様子を見つめ、青年は軽く息を吐いた。

「…ならいい」

「オイオイ、まさかこれで帰れるつもりじゃねえよな？」

「そうだな。警察として、このまま街が破壊されるのを黙って見過ごすわけにはいかんな」

『警察』

青年の言葉を聞いて、男はまた下卑た笑い声を上げた。
ひとしきり笑ったあと右手を構える。

「オマエ、警察だったのか」

「ああ。貴様のようなドーパントからこの街を護る…それが、俺の仕事だ」

「無能な警察が一人来たって——…んあ？ドーパント？」

言葉途中で男は首を捻った。

そして、青年に預けていた視線を自身の右腕にずらす。

前に突き出すような形で構える右手は、最早『手』と表現するには相応しくない外形をしていた。

無機質な金属性の腕。

自身の腕を見て、男は思い出す。——俺はもう人間ではないのだ、と。

そう思えば思うほど歓喜が込み上げ、胸を満たしてゆく。

「クククッ…！」

堪えきれない想いは笑いとなって肩を震わせた。

「何がおかしい？」

眉間に皺を寄せながら問う青年の声も男には届かない。

「そうだ…俺はドーパントだった…。人間じゃない。俺はもう弱っちい人間なんかじゃないんだ…。壊せる、…そう、何でも、思い通りに、全部…！」

人外の手を見つめながらぶつぶつと呟く姿は、まるで自分自身に暗示をかけているかのよう。

「おいっ！聞いているのか…！」

痺れを切らした青年が大声を上げ、ようやく男は其方に目を向けた。少しばかりその存在を忘れていたが、奴の出現によって最高の一時はぶち壊されたのだ。

男の中の熱が一気に冷めた。代わりにふつつつと沸いて出るのは、どす黒い怒り。

「まだ居たのか…」

苛立ちを隠そうともせず男は呟き、金属の棒と化した腕の先端に光を集めていく。

「そっぴゃあ、まだ人間には当てたことがなかったな」

標準を合わせる。青年は僅かに目を細めただけで、動こうともしない。

男は鼻で笑った。

ちっばけな正義の為にこのこやってきた馬鹿な警察。命を奪うのは簡単だ。だが、すぐに殺したりはしない。

まずは両腕を切り落とす。そして次は両足を。

その時、この警察の男はどんな表情をするだろう？端整な顔を歪めて命乞いをするのだろうか？

そうしたら笑い飛ばして、容赦なく腹を切り開いてやろう。

血反吐を吐き、苦痛の表情を浮かべる顔を見ながら、内臓をグチャグチャと掻き回して腸を引きずり出してやる。

想像ただけで胸が高鳴り、男は叫んだ。

「喜ベツ！俺がじわじわと殺してやるからよオ！」

光線は狙い通り、青年の左腕の付け根へと向かった。しかし――、

「ッ！！？」

男は目を疑った。

青年は避けたのだ。音速を超える光を。上体を反らしただけで、軽々と。

「な！？避けた…だと！？」

「当然だ。お前の能力は見たところ…おそらくはレーザー、だろうな。レーザー光は何か反射しない限り曲がらない、一直線の光。

おまけにお前はわざわざ俺の前に立ち、狙いを定めていた。あとは撃つタイミングだが…それもお前が叫びながら教えてくれた。反射神経には自信があるんでな。悪いが、当たりはせん」

「テメエ！よくもベラベラと…！！」

「本当のことを言っただけだ？」
「うるせえええ!!」

男は苛立ちに身を震わせ、激しい怒りを力に変えた。

「くそつ、殺す！テメエだけは絶対に殺してやる!!」
「ならば…やってみろ！」

形の崩れたオフィス街の一角で、両者の怒号がぶつかり合う。

レーザー・ドーナントと照井竜。対峙する二人は、共に睨み合ったままだ動かない。

否、照井竜は動けずにいた。

「殺す、殺す、殺す…ッ！」

そう呟く相手は、此方に鋭い視線を向けながら右の手に光を凝縮していく。

（あんな安い挑発に、こうも簡単に乗ってくれるとはな）

今や、ドーパントの標的はオフィス街全域から照井一人へと変わっていた。

おかげで街の破壊進行は防げたものの、それは一時的なものでしかなく、彼にしてみれば苦肉の策でしかなかった。

さつきは『当たらない』と豪語したドーパントの攻撃も、次もまた同じようにかわしきれるとは限らない。

最初の一発目もギリギリのところであけたのだ。ほとんどまぐれのようなもの。

理論上、軌道が読めさえすれば避けることは可能だが、相手の能力はレーザービーム。

光速の光に、一発でも…いや、ほんの少しでも触れてしまえばダメージは必須。どう考えても照井にとっては分が悪すぎる状況だ。

しかし最初の攻撃を彼がかわしたのは紛れもない事実。

故に相手も下手に動くことが出来ず、しきりに此方の様子を窺っていた。

どうにか近付けないものか…ドーパントから目を離さずに照井は考える。

遅かれ早かれ、このままでは光線の餌食になってしまうだろう。

襲い来る脅威を削るには、光線を生み出すあの両腕を押さえる他方法はない。

（だが…）

照井の顔が緊張に強張る。

その為には、もう一度光線をかかわす必要があったからだ。

（ヤツの動きは基本的に大振りで無駄が多い。狙うのは攻撃後に生

じる隙：そこで一気に距離を詰める！）

イチかバチか。

成功する確率は極めて低い。けれども、何もせず動かないよりはマシだ。

浅く深呼吸を繰り返し、照井は覚悟を決めた。
そしてドーパントを見据えたまま口を開く。

「どうした？俺を殺すんじゃないかったのか？」

あくまで挑発的に聞こえるよう、口角を上げながら言葉を吐く。
思った通り、レーザー・ドーパントはすぐさま反応を返した。

「こんのオ、黙れえええ！！！」

“来る”そう感じた照井は攻撃に備え、咄嗟に身を構えた。

憤慨したドーパントが光を乗せた右腕を大きく振り上げ、それとほぼ同時に照井は屈む。

刹那、彼の頭上を光線が通り過ぎていった。

二度目の攻撃を掻い潜ることに成功し、ほっと安堵の息を吐く間もなく照井は駆け出す。

ドーパントに向かって突き進む彼の背に――影が。巨大な影が覆い被さってきた。

ハッと気付いた時にはもう遅く、目に飛び込んできたのは今にも倒れそうなビルの姿。

レーザー・ドーパントが放った光線は照井自身を狙っていたのでは

ない。

始めから、照井の背後に建つこのビルを崩す為の一撃だった。

「ヒャーッハッハッハッハッ！」

耳に入ったドーパントの笑い声。そして、ミシミシという建物の軋む音。

戦慄を覚えた体は無意識のうちにジャケットの内側を探っていた。どんな時でも手放したことがなかったアイテムは――だがしかし、今は持ち合わせていないのだとすぐに悟る。

「くっ！」

どうにか逃れようと動き出したその時。

ビルの側面から剥がれた大きなガラスの破片が肩に突き刺さり、その衝撃によって照井は膝をついてしまう。

「……ッ……！！！」

あまりの激痛に声も出ない。起こそうとした身体は力なく倒れ込んだ。

見上げた先ではビルの一部が『パン！』と弾け飛び、そこから飛び出した大量の紙が、粉々になったガラスの破片や建物の屑のなかに優雅に舞っていた。

それらを後押ししながら猛然と倒れてくるビルの映像。

全てのものがスローモーションで再生され、ゆっくりと動いて見える。

どくどくと血が噴出す肩の傷口は、まるで灼熱の炎に焼かれたようにひどく熱い。

ぎり、奥歯を噛み締める音が直接脳内で響く。

（俺は…っ、こんな所で——）

直後、時は急速に動き始める。

降り注ぐ破片の矢と共に、ビルは一瞬にして照井を飲み込んでしまった。

凄まじい轟音と地響きが鳴り止み、あとに残されたのは跡形もなく崩れ去った建物の残骸だけであった。

ドーパント / 街を壊す異形の者（後書き）

はい、オフィス街で暴れていたのはコイツです。
ぶっちゃけ、特に重要なキャラでもないんで『レーザードーパント』
とか安易なやつにしてみました。

レーザーに関しての知識は薄く、ノリでやっちゃってる部分が多い
ので、ツツコミはどうかご勘弁を（笑）

3/11 追記しました。照井さんごめんなさい。でもやっぱりい
うか、何というか…こういうの似合いますよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329q/>

仮面ライダーW another story 『正義の罪/誰が為の世界』

2011年3月16日02時49分発行